

六百番歌合

一



景  
風

癡

物

愚

闇

約

行

變

約

遇

別

顯

佛

達

大藏

印

一  
癒

一  
番

初魚

左  
ね

女房

右

信定

と朝あてもうかのいひのとおとと義事さわはる  
右方や云左奇印のいふに左海りくそ  
左奇云右奇と軽じてもうわらはりこそ  
えまきれ判云うが難丁歎歎右奇  
うきはりとひりと魚うそもやくはらひ

まうりけり相をくもあくよひと魚ふ  
二  
番

左  
ね

毛豆

糸糸乃波の糸をもむれりと魚もしき被せし

右

桂家

圓もせん水くともうなまゆへよひよひもせ  
右奇云右奇を左奇左奇云右奇を左奇  
せまきれりもうれと左奇やへまくへづ思え  
へづ思えもうれと左奇右乃初向約半

お前をもれの事と仕の御法には  
あへて左端へくわすり

三番

左端

宣家明臣

見ゆとも人の筋はまつてはあらわす  
いはくがくの今へまへ缺くはまよとくちゆ  
右 家達

芳やか

五番

大正十四年十二月

左端

宣家明臣

ナヒテの連れに小手繩袖くねむるあり焉

右

隆徳明臣

まのほのほと無此事ともあたぬより被ひて  
右へ左へくのうとこそうわされどり  
ハシのうもゆふふくねくん弗たりて  
ト云者す芦の屋乃ぬよふとあるまわら  
キトハあらむおん物とてあるまわら  
うくちよと判左あわ難ゆゆ

御言はうけうつてからうすまうりぬ色辛  
殊計がくと只あもぬ乃る吉敷もあそへきく  
おれ身のよせねらへてもうねみすの宿  
一ひらは不可在来せぬれくゆり候  
御室下わ様也

五毒

た揚

頭眼

拂本よりよきもくもと云ふ事の如きつるえ

右

年上

うすむらうるをまつてうねの波のあらそいを

拂本と拂拂本小志とをいひしりかく  
そあまくとをいふと拂拂本ハ左脚と絆因  
まくろねよの拂本ハ右のとくとをほる  
あやまくと拂拂本と拂拂本とをいふ  
きうまくと拂拂本と拂拂本とをいふとをい  
む通うむかれてはまらぬるや判公左拂  
本とまゆりの拂本と拂本とをいふとをい  
むとまゆりの拂本と拂本とをいふとをい  
むとまゆりの拂本と拂本とをいふとをい

やまとわいづらうわくと秋水潤きるか  
あへたりとふくよまむれをまどりくわくもん

竹角

六番

左ね

兼家明臣

おゆうの爲をすくにまつてくらわめくらひ

右

中宮祐太支

又ゆう人のやういきをぬのまれとりのうり  
な右たよみえ字みじとわくくはくを会と  
ノイ判ぬ前まつめうのうを徳芳わすと

主之

七番

參意

女房

六番

左ね

女房

五番

右

中宮祐太支

墨のうらの波の海はれとあくちあくまともと  
音やふた音和可難むと云たての首尾不  
わ無想海かくつゝ判むたあくちあくの初  
聞の音あかくとくわくもとくわくもとくわく

八番

右端

義家

右

義家

人をあはせしむるをもとめよもぬうとすれ  
たまへてのうかくはれりしむるわかにあひ人を  
たまへてのうかくはれりしむるわかにあひ人を  
うふとみえゆき右向浦とひづれにゆふ  
うほたそじまつもとを小出ぬいとく傳はり  
竹子一端

九番

左端

頭筋

うねりてあがひてくはなままで横よこよこ

右

家譜

人をあはせしむるをもとめよもぬうとすれ  
たまへてのうかくはれりしむるわかにあひ人を  
うふとみえゆき右向浦とひづれにゆふ  
うほたそじまつもとを小出ぬいとく傳はり  
竹子一端

十番

右端

身經

とくにあはせしむるをもとめよもぬうとすれ  
たまへてのうかくはれりしむるわかにあひ人を

古

本草

おもひきのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのま  
前一のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのま  
こまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのま  
おもひきよめでそりあるあるあるあるあるあるあるある  
前一のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのま  
おもひきよめでそりあるあるあるあるあるあるあるあるある  
おもひきよめでそりあるあるあるあるあるあるあるあるある

十一番

左端

本草綱目

聖一ちゆ澁のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのま

古

信宣

聖一ちゆ澁のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのま  
古一のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのま  
かくと雖のむ一や判一のまゝのまゝのまゝのまゝのま  
神一のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのま  
一後のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのま  
もまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのま

十二番

右端

本草綱目

主の御心の事はかねて思ふ事少く思ひ出すが爲め

古

達徳翁

かくかくの爲め本小野とがむじうれまほせじ  
左吉また不思ひ西や判ひぬ前乃筆耕を  
写へばかくちやんの爲とあつておもひ  
あへうきしんのやま下ふうにまわらへられた  
吉のトモやおこりてかゆうよふるく  
誇とまへる

二番

圓魚

左翁

主の御心

樂あらわめの事はかねて思ふ事少く思ひ出すが爲め

古

裕次郎

今昔小行の爲め本小野とがむじうれまほせじ  
古や云左吉翁難處と云古奇事下に續き其  
裁判は多難の爲めとけりて下に續き其  
思ひ出すが爲め本小野とがむじうれまほせじ  
古や云左吉翁難處と云古奇事下に續き其  
令一幸勝翁の

十二番

左翁

頭船

主徳の御おゆみをまかはしよまひたのく

右

家達

あらめに徳をうきまつてお宿内もわにむねみよ  
左右たと念じてはくに判ひぬきに湖瀬  
ああ向ひやすむにすむとまほんとがまく  
あらめくめくとくめ神のく理くわや  
りくんわあくまゆるゆわん中行ひあ  
坊くへく竹く年

十九番

左ね

兼家明臣

主徳の御おゆみをまかはしよまひたのく

右

達信鈴

家徳の御おゆみをまかはしよまひたのく  
左右たと念じてはくに判ひぬきに湖瀬  
ああ向ひやすむにすむとまほんとがまく  
あらめくめくとくめ神のく理くわや  
りくんわあくまゆるゆわん中行ひあ  
坊くへく竹く年  
らくねりく

十六番

左端

吉家明治

名小豆子のうさかねの筋のあらゆる變り種はあります

右

信宣

糠粉も筋もうな種を多くも實すらすハ神ハ金  
左多金也とて有病ハナリテ病狀判云左多金  
奇病也傳小行うと右可也此病也傳也  
無事左端すや行ひ

十七番

左端

文房

筆端之末かく今を書の氣あまくはよほどかうし

右

雅志

まよめの爲一山菊乃池つひかのうり神そゆきの  
常云左多金雖也云右菊の池ハカノせん  
とんちんれいりひとみちん也判云左多金  
菊乃池も小半よりくかくとシテ  
左多金とりほ不一也

十八番

左端

吉家明治

右

新蓮

さあてあざとく神かくらむの里風林乃と有  
有りておなき、りりうたまをあそびしと云うと  
新蓮以後まことに里風林は新蓮の號也判る  
唐れふともとおせりりう三史八代より  
乃實者民士おのへばりつゝやめあり  
きあくまくやう外うなづかまくまく里風  
林うわくいあくく房とまくゆんと之  
あふとへゆくらに左も唐まく里風  
じ

十九番

見底

馬家明治

牛くふくかめ汗ぬきをなほぬあくと海こくあよ

右

猪木

ひうひうかめ汗ぬきをなほぬあくと海こくあよ  
右古えよゆりくらわくの東方人今之判  
云あの方をくくまうせんか人アラヒシキアウ  
ラヒシキアラク朝山もあくぬ文走トロモ  
ありぐるひき川トヤ経左あくぬゆと

まのめうわくをあらわすかねと及ぶ  
いふうのうもあらわすかねと及ぶ  
渢ひまくは小國へんぐ

二十番

右格

多羅

多羅のうもあらわすかねと及ぶ  
右格のうもあらわすかねと及ぶ

精大主

左者たる事難い事判左主のうへり  
せハとくの事難い事判左主のうへり

乃足小やくもアキラカニシテウツメノ  
半ち小やく

二十一番

東家明居

まよわす事無事有り人うへのれぬ

右端

信宣

まよわす事無事有り人うへのれぬ  
右端のうへのれぬ事無事有り人うへの  
よみせぬ事無事有り人うへのれぬ事無事  
よみせぬ事無事有り人うへのれぬ事無事

多羅のうへのれぬ事無事有り人うへのれぬ

ひくやとよもかわくとせーはあれきの  
御や徳あらひとせーはれの様よもけきて  
あはまちまつりとせー

二十一番

右 扇

顯眼

味庵あく味すうたみのうさくもよへあはり

右

家譜

むしゆね乃種井と橋くよじのむとつて放すと  
左名たふを種い里や判は左下トアハヒドリ  
乃あゆくもくらむと甚後もとおまくと

まゆ生産者井と橋くよじのむとつて放すと  
ふゆくまとつむとめくつてつてくほある花  
くくぬくとくね種い里

二十二番

右 扇

宣義明臣

うけ流者れ治の空よりかくすゆきえんと  
右

麻蓮

馬のまくはあれ池乃毛の枝葉とて、い種のみくねく  
左名たふやうのため判ふたあくられ源をと  
うと右とくの毛乃毛の枝葉れ枝葉とて、い種の根

おれりうと神がうけいじとけり施事もふ  
くふくとおもてんす合へ戯言うほしや  
わんまわせのきの枝の枝もたゞくわらを  
まへへ神のまへへわらわらうまわ  
人勝劣るよわらし

二十首

左端

書

まきまきえりのくをうよおもてんじまくま

右

隆徳明治

まくらふくわらわら山陽を廢れすうわまくら神

まくらまくらはれ時をたまられとえり  
まくらまくら不審なよみ右あ山陽  
まくらまくらとくに奇と思ふ稀とれども  
まくらまくら判云左のぬけのくたはれども  
まくらまくらやをあめくらくゆき  
まくらまくらゆきりつもくらくゆき  
まくらまくらゆきすまのゆき

二十首

鶴巣

左端

隆徳明治

はきかみのひよしに約やくすに小難を人引けま

右 桜太支

ああくゆめのよしをうきとめうきとめうきとめうきとめ  
左右左左小難一ト角折判云二尾花子

毛根あさくね約約約約約約約約

二十六番

左物

兼家船

まきかみのよしとめうきとめうきとめうきとめうきとめ

右

雅志

まきかみのよしとめうきとめうきとめうきとめうきとめ

二十七番

左物

頭船

まきかみのよしとめうきとめうきとめうきとめうきとめ

左物

家譜

まきかみのよしとめうきとめうきとめうきとめうきとめ

まきかみのよしとめうきとめうきとめうきとめうきとめ

左右左左小難一ト角折判云左角折判云左角折判云左角

右小難あさくね約約約約約約約約

まきかみのよしとめうきとめうきとめうきとめうきとめ

乃木主神よりの御心事

二十八番

左端

主神

傳承跡と枝と三輪山の山の法事

名

麻蓮

三輪山松立門と二ノ小字の山道  
右吉より雖不見山門と之判ふあすの  
三輪山松立門と二ノ小字の山道  
右側や右吉松立門と二ノ小字の山道  
是處に右吉松立門と二ノ小字の山道

二十九番

左端

主房

御坐り山よりまひなまひ山より松林木と山の能

住室

四十七山よりまひ山より松林木と山の能  
左吉山よりまひ山より松林木と山の能  
左吉山よりまひ山より松林木と山の能  
左吉山よりまひ山より松林木と山の能  
左吉山よりまひ山より松林木と山の能  
左吉山よりまひ山より松林木と山の能  
左吉山よりまひ山より松林木と山の能

もゆる船とおわくとくふ

三十番

左端

宣家御名

東北の事一高小ちむきんぬ内乃ね。や段  
吉 滝行朝名

あまはまくわらひせりつての成浦くろ段江  
左右走り。主姫と宣判云ぬ前走り。傳  
けりがれにまのれうき精り。ゆく車

一番

右端

行氣

宣家御名

今度は意の爲てこの終末されしゆゆやの作よ。往ひ

右

達氣

まつやか今叶く。身みだらけ御詠のうと。左  
官アキ多うこ。奴僕やびきれねどしてひる。左  
手まくろう不審や。君乃急う。左からく。左  
ゆく来さざり。左から。左から。左から。左から。  
りの意情も。身も。御中へ。かう判云。左意の左  
波。左の意の意。身も。御中へ。かう判云。左意の左  
之御。左の意の意。身も。御中へ。かう判云。左意の左  
や。左の意の意。身も。御中へ。かう判云。左意の左

二番

右 拍

兼家明臣

伊豆守生高丸事小野毛し松木村山也あわま  
と

右

拍合丈

衰つも思ひよきやまの歌うをうけの眞の神は歌ひ  
左右も小野小室角判云左もひくに左  
うへおへき様成る／右もひ様も成  
三初と准とひふ人野ともとへ

三番

右 拍

李御子

歌うもんはうきよきよきよきよきよきよきよきよき

右

達信

神さあくみ紙作もらうううううううううううう  
宮一公左衛門主下門左門主右主の御  
一加くねく小初入室年よきよきよきよきよき  
うめうめうめうめうめうめうめうめうめうめ  
まめうめうめうめうめうめうめうめうめうめ  
そくまくそくまくそくまくそくまくそくまく

三番

右

顯照

而角やせき此経月よりアラム林又アマセハ神ニ紹

吉湯

信宣

四ノ山の山ノ内ニ小山テアモト有リテ後<sup>ノ</sup>アヌ  
左右生シテテ音指難シ由ドリ判云左テ又六十  
串ニ立テテモアモト<sup>ノ</sup>ハシヨリテ黒毛  
小神ニ御ツテアリテ<sup>ノ</sup>ハカリタマヤナリ<sup>ノ</sup>ルんガ  
ナキアリテアリテ<sup>ノ</sup>ハカリタマヤナリ<sup>ノ</sup>ルんガ

力毒

石猪

宣家朝臣

年も健ニ行ク聖も御子山尾ニ乃達のミムカニ

吉

家清

駕籠ヲ被ル宇哥ニ御子山尾ニモア御れ社の下モ<sup>ノ</sup>繩  
左右生シテテ音指難シ由ドリテ<sup>ノ</sup>ハカリタマヤナリ<sup>ノ</sup>ルんガ  
ト宣ムテ<sup>ノ</sup>ハカリタナヘテ<sup>ノ</sup>アリテ<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>怪<sup>ノ</sup>う  
ぬ<sup>ノ</sup>アリ<sup>ノ</sup>ハカリタミ<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>ト<sup>ノ</sup>社<sup>ノ</sup>モア御<sup>ノ</sup>繩<sup>ノ</sup>ア  
ウ<sup>ノ</sup>ハカリタミ<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>ト<sup>ノ</sup>社<sup>ノ</sup>モア御<sup>ノ</sup>繩<sup>ノ</sup>ア

さくへくや

空薦

左湯

女房

東御事のまゝ御事のまゝ御門神小走らぬ様

右

麻連

主松門の奥ハ浪打もあま事御神のまゝ御事のま  
左主たまはす。主事や右主たま事難ヤ利  
主左の主松門は侵小みゆめう然古乃未  
主事くま主事て主事うちひの神ゆむらる  
御里くまじとくらは小室主事くま主事

湯と主事

七番

御意

顯昭

右端

卷之三十一

萬葉やよれ共ハヤ一主事の松や木移ちむかへ主事

右

達意

主のじふか小處れ教をうすはせて。此事が主事も  
右ア主事ア不被度來。御わまくこと主事  
御よ主事ア旨利主事ア。而後主事も主事  
の主事不被度來。主事ア。而後主事ア。一主事  
主事ア。而後主事ア。而後主事ア。一主事  
主事ア。而後主事ア。而後主事ア。

八番

左端

氣宗網

御まちをすくわらへるをうなづかしめり

右 稲ふえ

まそひじひのまきあひりほひが風氣も高めれ  
左音ちねき一肩寄可ち小やきむれは  
ノ判云左はうせはいと称と今タ一判  
きくハ行ふと縁をくわ

ぬき

右

まみ津

偽れまのゑとしよめくとくのまくわ

右

麻蓮

まのじまきられを移のまめにわりへゆくとまく  
右アム左アムヤマアム右アムシテアム称  
乃ミのとけきともまえと判云右アムシテアム  
モ称モリアムシテ右アムシテアムモト想モ  
ねもとアムシテハヨリトアムヘキヤ

ま前

右端

書房

まめくまくらまくねむだますハアムアム風氣もれと  
左

達信

まめくまくらまくねむだますハアムアム風氣もれと

右方ト左方トはよき争ひある左方云右方  
不耳の判云あくられをもゆくもとくと  
ゆう處の氣うゑふ表がも活小物を  
同様とへ

十一番

右

立家明臣

わらひす淮じきかくかくたのひきふれ事成

右 賸

信宣

みだりのめぐらし人を偽とがむくとぞりよひ  
左者二郎と争ひて判云れめハラスのとへ

ふきし事あくらへたゞ人のゆき  
き落とせねばまくゆり以左下の揚

十二番

右 稲

立家明臣

左者二郎と争ひて今を拂され却もまくゆりされ

右

立家明臣

ゆくわがのつとくぬくへ拂ふまくもろくゆりされ  
左者二郎と争ひて判云れまくゆりされ  
左者二郎と争ひて立家明臣と争ひて立家明臣  
ゆくわがのつとくぬくへ拂ふまくもろくゆりされ

總論きくや左を勝チ

十二番

約束

左

顯昭

入玄のあふけまくはまく神を称しの縁よりいよ  
右勝 信宣  
左御子の御事とく汝の若事とくの御とゆ袖乃上  
古御云左御子の御事とく縁よりいよ  
御ち様よやせん又稱すの縁よりいよ  
入玄の御事とくの縁より二きにゆきりなす  
若一ノよつて生の判入玄の御事とくの福宿  
「翁れぬ段右御事とく縁よりいよ  
」翁れぬ段右御事とく縁よりいよ

十三番

左勝

義理

少く多くはるよりくもくやええまうせやア  
とくすまくもくへも下苦牛こまく  
行く、空ゆひ右の場

十四番

左勝

義理

雖處處相

義理

右

中宮精丈丈

やくいも本打とくの風の氣とくまく  
右御子左御子とくの風の氣とくまく  
ちのくわく相とくの氣とくまく

まほあくとさううとや左をあくわうよし  
もわりゆよりとひつううとくとくせんわ

左乃勝取合

十九番

左房

東家朝臣

里の居のそひへりとひりの合をおもひる

右

雄家

まちうひと思ひひうへとおなまえ程のひは  
左若小学校半と中下判と左のほりい  
西ノ原家がれまくらぬ程約ひますを

ふたまくよみの入墨似不知れ矣然ひ左

右房

東家朝臣

更不そりキアムヌル称も高きくセホシトマサの  
右

麻蓮

すゑ

まちうひと思ひひうへとおなまえ程のひは  
左若小学校半と中下判と左のほりい  
西ノ原家がれまくらぬ程約ひますを  
前よりき形とりて傳よゆる事く

今

十七番

左端

女房

まき草の葉の扇子はうわせありとじゆく

右

家達

れめくやまとひくすくまくくわうのよし

左者手一宣の重判云あ首た小波の御之侍

小竹ふくらむ左者生れ御仕官すの約

左乃端うづく

十八番

左ね

宣義朝臣

風

名

達作納臣

西の空をうかがひもし山の緑れ月、紅葉てうるま

右

達作納臣

右者手一宣の重判云あ首た小波の御之侍

小竹

御仕官すの約

十九番

遇意

家達

主事の御事と神は少くとも和らぎにあつた

右端

詮也

あさきの御事と神を多く新し物の神がもつて  
左端が下りて是を御事と神がもつて  
あさきの御事と神を多く下りて是を御事と  
あさきの御事と神を多く下りて是を御事と  
海内よりまことに右端と下りて是を御事と  
海内よりまことに右端と下りて是を御事と

二十番

左端

主事の御事

主事の御事と神を多く下りて是を御事と神

右

椎木

明るいわゆる物の主事の御事と神を多く下りて  
右端が下りて是を御事と神を多く下りて是を  
奇奇の御事と神を多く下りて是を御事と神を  
終おも果もしくあさきの御事と神を多く下りて  
うさきの御事と神を多く下りて是を御事と神を  
左端が下りて是を御事と神を多く下りて是を御事と

二十一番

右端

東家明治

三と金夢れぬよひゆの様と重んじぬ

右

家達

あくあわいもを拂まき涼りあら人の心をすりき  
左右左小まかくすゑへ判云左あ。草子といひ  
よ小たゞこ小かくへけり者等一キ種がま  
左みやゆうんねとまくの角くおどりをさる  
へくま左端をじ

二十二番

右ね

女房

うせまなはせり拂うてりやのあざらきを金流

九六三二二三

右

達作明治

右とまゆりとめりとめりとめりとめりとめり  
左右左小まかくすゑへ判云左あ。草子といひ  
あくあわいもを拂まき涼りあら人の心をすりき  
へくま左端をじ

二十三番

右端

宣家朝長

すくまなはせり拂うてりやのあざらきを金流

右

信宣

是事は左近が口を封して死んでゐたのであるのれおうか  
左近が死んでから初めにまつたとて左近が死んでから  
左近が死んでから初めにまつたとて左近が死んでから

二十番

左端

顯昭

家守り屋

麻連

義の爲めにやうほん行ひる男を情ぐらり  
吉方や云左近がまつらうの娘ふと娘の娘

ちくら左近は小姓と角判云う神をもゆ  
うんがもみりうといそん不及難い情ぐら  
がうめくめくめくめくめくめくめくめくめく  
めくめくめくめくめくめくめくめくめくめく

めくめくめくめくめくめくめくめくめくめくめく

物をとんでもうへ

二十九番 別意

左

頭船

老翁をうだりひそめにむとこれよ経よ幼本志

右端

船合之

車うこ車うわとくの車うくまも小車うし車う

右車うこ車うわとくの車うくまも小車うし車う  
左車うこ車うわとくの車うくまも小車うし車う  
左車うこ車うわとくの車うくまも小車うし車う  
左車うこ車うわとくの車うくまも小車うし車う

三十番

卷之三

左

妻室

竹竹うと朝吹名歌と歌ううの種うまう日うう

右端

信宣

高車うと歌うあふううがううれ紹末うい先  
右車うこ車うわとくの車うくまも小車うし車う  
左車うこ車うわとくの車うくまも小車うし車う  
右車うこ車うわとくの車うくまも小車うし車う  
左車うこ車うわとくの車うくまも小車うし車う

二十七番

右端

宣家明昌

まわるわざは道の壁も乃が氣よゞすへ物ハ可

古

雄略

別説の事きりかはれの段の事とさうありよ多きをし  
古一處奇絶はくもやなま古可草下  
詠草す判官左上と勧請けまひかく  
もよえゆくもよしよしよや万葉集すく  
小竹あきらか不可度考古ハ和歌のを  
詠はくくさりくよくもゆく寫代うかに  
きとりづの今下ふじよよがおてやゆく年

二千八番

左端

多家明居

ほきあがくあくよめぬくくみよふあふつりく

古

麻蓮

通じたるへ半年九教すくてもあきそゑのく一箇  
古アシテモモホ松鶴古下云古奇くのくじよ  
くのくじのゑくよふせくら判官まみすれ  
社主小僧よづくわくとく

二十九番

左端

兼家新居

むくよく思ふもくかくよあつて通ハセシモ

右

隆信約左

まこととおひの道のあじとめうきまつらわひせ  
宮へて重院をあくとおもふに左の事  
すまことおひの道の明と隣へくは離別  
乃ゆうとおひの道の明と隣へくは離別  
務務のむとまざり毛色亦因音かでそ  
務務のむとまざり毛色亦因音かでそ

二十番

右端

書房

三重の山奥を越じてまづ月夜の見入る

右

家清

風雨と嵐よやきじま代ふわじとめくにまほ  
左のた方を感まちの左方顔門にまくに判  
五度の八月小あ波多と左奇嵐よ  
あやまの波多とさりぬまの家親た後  
やう波多とさりぬまの家親た後  
けよんたれが波多とさりぬまの家親た後  
きうちやの波多とさりぬまの家親た後  
あよ波多とさりぬまの家親た後  
くりあすて葉平野をあすてりわ反

まうりの主と小浦と給医板子或云橘忠幹  
守忠幹ち長風二男也近喜人也時々不審

素平ハ元至元年辛巳

一卷 頭卒

左

毛澤

主小浦の主と小浦と給医板子或云橘忠幹

右

毛澤

主小浦の主と小浦と給医板子或云橘忠幹  
守忠幹ち長風二男也近喜人也時々不審

二番

左

兼家野

リリ柳枝もやく精果く主と源小浦と橘忠幹

右

家澤

主小浦の主と小浦と給医板子或云橘忠幹  
守忠幹ち長風二男也近喜人也時々不審

主小浦の主と小浦と給医板子或云橘忠幹

守忠幹ち長風二男也近喜人也時々不審

二番

左也

玉家明臣

神のふかくは腰刀をもとほりねじこそ世よ立

右

信定

うとうとゆてまみるに衣冠にしたむと  
右やあらとし防人を半とまの事に  
右うれしくつると利公左とくわる不  
殺耳のやを落へ後小竹と實よめ  
多き猪のへん角へんとくへあわく

多きや

三番

左

玉家明臣

うとうと今無事で喜びしおまへる

精太夫

右勝

うとうと人の事ありづらくあらぬことおとづる  
右やあらと腰刀のゆすり下衣不可ぬり  
「判定」を失ふゆくとてひきびくのよ  
右手をまわゆりくへんとくへんとくへんとく  
多き猪のへん角へんとくへんとくへんとく

多きや

本番

右

頭取

まよひて歎かぬれふゆりく彼よりかお詫びを乞ひ、  
右 游

隆信院

人重みのうりふ度一々のよされとくわむ  
左右の事す旨判云たれどもうちかまうとく  
ハぬりとむりとやぬくんちのり」とうふ

くとねじ

本番

左端

女房

六六四三二二三

紳介浪山の候と准ひよもよきり御言を也

右

席蓮

まよひの今を今に招きれどもう程の度とく成  
官へて左寄主招致左とく就服人のうち病  
生為多きの事ゆく旨判云左所上るハ宣く事  
約う成果乃うりうや体小仰くんち可左寄  
左の勝

七番

左端

稀意

頭取

まことに此處事あや郭子を風うかの發見りて

右 信之

賀事の情乃山はよき爲くもあらわやう一あひのえ  
左下云誰無事難而被度費左云情乃山は  
アラシノ判云ぬま山乃町も情の山ある  
城女曰く

八番

左端

多喜明長

詮叶難ひたとまつてあがれどもあらひうるや

右

家清

あらじき跡次うむとまづれの程をりうてあら  
左右たすよあらめあらく事難キ一山をよ判  
云左年定まくやうのう跡を一山とぞ

九番

左ね

多喜明長

まのゆくの情ふるきよきよきよきよきよき

右

家連

今かまくわいおとめうつゆきく風ふゆ中れ経ませ  
家下云左すよあらめあらく事難キ一山をよ判  
云左先うり山一山をよ判左すよあら

情の如きはお教すくぬ因等に於て

わざとあつ

十番

左

女房

わづかの被り物も萬端果てぬまへ

右

仕事

書字の情うなまきをよしむ程のを下そま  
ちやうの者ほしと字をひく下まう  
かくも黒くよしや判たすきうつり音も  
い事難は不及すや又筆まぐれ形くま

卷之三十五

まことの事あるうじにむらわゆる  
みえゆるあつてやがてまくらやの右房ゆ  
ら年

十一番

左

室家御后

奉さゆる所をかへりかねてかのうを名ひまつ  
右房

所あるうちれどもゆいわゆよろひあく年  
右房もかへりかのうを名ひまつてかのう  
種めの下をかねてゆりうへ刻みの新半

十二番

あまくわうづふみの難いふくを古にわけん  
とまくも蒲所一約ノミーと種  
む老毛乃る所ノミー之若くゆきとすがね  
あまくわくハ御め小内毛ノ皆以古の爲

十二番

右勝

兼家綱臣

雅小人あよと二重のす神じき落小氣とむりひめじ

右

源氏綱臣

里そがく経狀とすがれ一乗すとくもひくもえ

左吉たと御難之ゆきア劉云左守御傳小約

まきかどるすア右ノシホウルん古年一本  
白郎ノ称うんさひりふりふりふりふりふりふ  
むりやうと四つの右勝へてや

十三番

緑意

右勝

女房

金きくくよもかくの通語をゆきと壁あくまくまくまく

右

源氏綱臣

かうりよ今アヒの曉よやくの云れまくまく

古やくみえまくやとくひかくつらふりふり

あくやくはくとお範利云左毛もくひかく

もしも後でどうぞおまへらうしむし御み文字  
のよじくわが一枝のうなづひてふとくへ  
らんと文字の筆小のうちをゆき一古手の  
毛をもぐるま可れぬかくとくとくの  
もむりありあくやあらうに野あさ  
りつゝゆくみえゆりゆくと

十四番

左房

まの経

恨うるの筆あへふうりぬちゆうはれのまわら

経

五十九番

竹葉すとくゆよきぬ筆角をと人得あくひく  
よ不雅ア判云右奇ひとめ第一切多船陰堂  
やわくとて下傳ふやくらゆくとくとく

十五番

右房

まの経

経はももすの見はりの秋のこまが汽船でゐた  
右や云萩桔てのまきぬ桔もゆ大船くら

家清

豪傑や闇セく歌のまくともかね黒うけのくぬと  
右や云萩桔てのまきぬ桔もゆ大船くら  
ト云闇セく歌云かくア判云萩桔くら

あくとおへあくとも風のうねりとひづり  
三毛丸圓月をかく風があくとやまちうそせ  
うう鶴ふやかく行なみすすむとゆく

白一

十六番

左 桃

葉家洞居

乃のうと約一月のむらのまつもとよしの

精金文

のふへうへるのうじまの今、程の更に  
たてに花井の地に判去ぬれの視洞ありよ

五十六番

十七番

左

顯眼

かゑれ鶴やまらとけいとよ雅小ひきくとくめ  
右端 信宣

沙もたう絆と西下中かくの後まくらみくわめ  
右端 信宣

さくよにほくまくや右之未だ岩落、  
東よむ勝たむる

十八番

左

定家相馬

右

麻連

かくへすとせん人ハシマツのゆうひ候のまにかくは  
黒の傳ハタケあくれりハタケむら様ハタケはくよハタケて御ハタケと  
左者ハタケかわくハタケる事ハタケ判ハタケたのまにかくは  
詰ハタケたの様ハタケアト小月ハタケとヨリカのモーの邊ハタケよ  
おどもくわ

